

父親の子育てによる子どもへの影響

永井 暁子

(日本女子大学人間社会学部 准教授)

1. 問題意識

父親の子育てへの参加が推奨されるようになったのは1990年代以降である。行政面の大きな動きとともに育児する父親の手記やインタビューがメディアから発信されることが増えたのは1990年代である(内田 2001: 32)。しかし、2000年代に入っても労働者の長時間労働と母親任せの育児の実態において大きな変化はない。少子化の背景あるいは要因の一つには、男性の働き方・働かせられ方と母親任せの育児状況があるとされている。2007年、進む少子化が原動力となって、ワーク・ライフ・バランスの推進に政府も重い腰をあげるようになった。内閣府 仕事と生活の調和推進室によると、ワーク・ライフ・バランスに関する政府目標は、週あたり60時間以上勤務の雇用者を2017年には半減、6歳未満の子がいる男性の家事・育児時間について現状一日あたり1時間を2017年には一日あたり2.5時間に、男性の育児休業の取得率0.5% (2008年時点では1.23%) を2017年には10%にとなっている(内閣府 仕事と生活の調和推進室 2007)。

父親の育児や子育て¹⁾の推奨は「男女共同参画社会」にとって当然のことであるものの、子どもにとって父親の育児参加の有無はどのような違いがあるのだろうか。父親が子育てをすることは、子どもの父親への関係の満足感に影響を与えるのか。父親が子育てを行うことから、子どもは何らかの利益を得ているのか。本稿は、父親の子育てが子どもに影響を与えているかどうかを検討する

ものである。

2. 既存の研究と本稿の位置づけ

父親の子育てに関する研究とくに実証研究についての整理は、石井(2009)の分類がわかりやすい。父親の子育て研究は、①父親の育児参加状況とその推移、②父親の育児参加の規定要因、③父親の子育て参加の家族への影響、の3つである。石井の分類では、③に含まれている父親自身への影響、たとえば子育てによる父親のストレスの増減は、④父親にとっての育児、としてよいのかもしれない。また、父親にとっての育児の意味(内田 2001; 木脇 2000)や父親としてのアイデンティティの研究(矢澤ほか 2002)、父親の性別役割意識やジェンダー構造(船橋 2006; 小笠原 2009)などの研究も④に分類できるだろう。

本稿の問題意識は上記の分類では③に該当する。③の中でも夫婦関係や妻の精神的健康に与える影響に関する研究は、結婚の質研究として、あるいはストレス研究として、それぞれに蓄積がある。石井(2009)によれば、父親の子育て参加の影響は子どもに対してはほぼ一貫してポジティブにあらわれているが、日本ではこの領域で子どもを対象とした調査研究が多いとは言えない。

アメリカの研究では、縦断調査から、父親と過ごす多くの時間や父親からの愛情、父親の子育て参加が、子どもの精神状態、成人後の自尊感情、成人後の教育・経済的業績と正の相関にあるこ

図表-1 記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
性別	413	0	1	0.54	0.499
子の年齢	413	9	18	13.41	2.625
子ども人数	413	1	4	2.06	0.656
母教育年数	411	9	18	13.60	1.727
父教育年数	404	9	18	14.30	2.361
母年収	404	0	1150	109.75	166.962
父年収	389	100	2250	844.34	408.929
父母年収	390	0	1150	721.53	289.791
母労働時間(週)	408	0	67	17.03	15.094
父労働時間(週)	404	0	67	51.60	11.841
母の子との時間(週)	389	0	4440	478.86	569.713
父の子との時間(週)	394	0	1770	190.22	270.553
家族全員と就寝前に過ごすことが多いか	412	0	1	0.40	0.491
家族全員での夕食の回数(週・母)	410	0	7	2.83	2.042
父母と一緒にレジャー	409	0	4	1.45	1.517
母子の会話頻度(母)	412	2	6	5.31	0.924
父子の会話頻度(父)	401	1	6	4.53	1.136
夫婦の会話頻度(妻)	410	1	6	4.56	1.260
子が0~2歳時の父の育児頻度	394	0	35	12.53	8.750
子が3~6歳時の父の育児頻度	390	0	56	19.26	12.363
母の子への情緒的サポート(子)	408	0	2	1.76	0.539
父の子への情緒的サポート(子)	408	0	2	1.51	0.728
父との関係満足度(子)	389	1	5	4.22	1.004
母との関係満足度(子)	395	1	5	4.47	0.797
妻との関係満足度	402	1	5	3.90	1.045
子との関係父満足度	399	1	5	3.91	1.036
子の抑うつ度	408	9	27	14.59	3.738
父の抑うつ度	398	15	48	40.68	5.708

と、非行行動とは負の相関にあることが明らかにされている。日本の研究では、縦断調査は少ないという点で限界はあるが、父親が子どもと遊ぶこと、父親の子育て、父親とのかかわりが子どもの情緒性、社会性、自発性、独立意識、友人ネットワークの広さと関連しているとされている(石井2009)。

本論では父親の子育てが、子どもの父親との関係の満足感に影響しているかどうか。子どもの抑うつ度に影響しているかどうかをみていく。未成年子の父親との関係満足度に関する分析はほとんどみられない。家庭生活への子どもの満足度については、親との会話頻度、親の自分への理解、親との共同行動の数、親の家庭生活満足度を規定要因としてあげられている(大山2001)。子どもの抑うつ度に影響する要因として、夫婦間葛藤・夫婦の愛情関係、家庭の雰囲気や親の養育行動、親

自身の精神的健康があげられ、親との情緒的つながりが重要であるとされている(菅原ほか2002; 川島ほか2008)。家族関係の良好度が子どもの抑うつ度や不安感を低下させ(内田・藤森2007)、中学生の抑うつ度に親の非理解度が影響している(小保方・無藤2006)。

これまでの研究では、父親と母親をひとくくりにして親との関係を用いているものが多い。また、石井が指摘しているように(石井2009:19)、これまでの研究では、母親のみの回答によるものが多いこと、父親の育児の効果をみる際に母親の子育ての影響を除外していないことが問題点としてあげられる。本稿では、父・母・子のデータを用いることにより、それぞれの視線から家族生活を理解することができるとともに、こうした分析上の欠点について補うことができる。

図表-2 父の週あたり労働時間

	35時間未満	35～42時間	43～45時間	46～48時間	49～54時間	55～59時間	60～64時間	65時間以上
小学生	1.7%	6.9%	11.2%	17.2%	19.8%	11.2%	12.9%	19.0%
中学生	6.2%	7.2%	13.4%	10.3%	16.5%	12.4%	18.6%	15.5%
高校生ほか	4.8%	6.3%	17.5%	7.9%	22.2%	15.9%	11.1%	14.3%
全体	4.0%	6.9%	13.4%	12.7%	19.2%	12.7%	14.5%	16.7%

図表-3 父親のワーク・ファミリー・バランス意向と家族と過ごす時間に対する評価

	十分取れている	まあ取れている	あまり取れていない	まったく取れていない	全体
仕事を優先	11.9%	32.2%	50.8%	5.1%	14.4%
どちらかといえば仕事	5.7%	40.2%	46.0%	8.0%	21.3%
どちらともいえない	15.5%	31.1%	51.5%	1.9%	25.2%
どちらかといえば家庭	7.7%	49.6%	39.3%	3.4%	28.6%
家庭を優先	4.7%	37.2%	41.9%	16.3%	10.5%
全体	9.5%	39.1%	45.7%	5.6%	100.0%

3. データ

本論では、財団法人家計経済研究所が2008年7月に首都30km圏で実施した「現代核家族調査」データを用いる。ランダムサンプリングにより妻年齢が35～49歳の核家族世帯に属する夫、妻、および小学校高学年から高校生の子に対して行った。回収世帯は1,020世帯、回収率は26.3%である²⁾。本稿で分析するのは、母親、父親、対象子の三者が回答した413ケースである³⁾。本稿で用いる変数の基本的な統計量は図表-1に示している⁴⁾。

対象子の学齢は小学校4～6年生32.0%、中学生33.0%、高校生等35.0%である。母親の平均年齢は42.3歳、父親の平均年齢は44.6歳である。一人っ子は17.0%、二人きょうだいは60.9%、三人以上は22.1%である。母親も父親も高学歴者が多く、短大・高専・大学・大学院卒の母親49.1%、父親では59.2%である。父母の合計収入は平均846万円であり首都圏でも比較的高い。母親が専業主婦である割合は32.4%、公務員や民間の正規職員として働いているのは9.3%、58.3%が臨時職員や自営で働いている。

4. 分析

(1) 父親の働き方

回答者である父親のうち公務員や民間の正規職員として働いているのは78.8%、自営が19.2%、その他2.0%である。多い職種をあげると、31.1%が管理職、20.0%が製造、14.9%が専門職、12.4%が販売・営業である。

週あたりの労働時間は平均52時間で、子どもの学齢別に分布をみると42時間以下は10.9%に過ぎず、65時間以上働いている父親も16.7%を占めている(図表-2)。また、子どもの学齢と労働時間とは関連がないことがわかる。データを見るまでもないが、子どもの成長とともに労働時間を増やしているわけではない。

父親が望む仕事と家庭のバランスは、「どちらかといえば家庭」が28.6%と最も多く、「どちらともいえない」が25.2%、「どちらかといえば仕事」が21.3%を占めている(図表-3)。家族と過ごす時間が十分に取れているかという点、「十分取れている」と回答した者は9.5%にすぎないが、「まったく取れていない」と回答した者も5.6%であり、それなりに納得している父親が多い。

(2) 父子関係の満足度

家族と過ごす時間が十分に取れていると回答し

図表-4 子の父との関係満足度と父の子との関係満足度

		父の子との関係満足度					全体
		不満	やや不満	どちらともいえない	まあ満足	満足	
子の父との 関係満足度	不満	.3%	1.1%	.3%	1.3%	.3%	3.2%
	やや不満	.0%	.8%	.3%	3.5%	.8%	5.3%
	どちらともいえない	.3%	1.6%	1.3%	3.7%	.3%	7.2%
	まあ満足	1.3%	5.6%	1.6%	19.7%	7.2%	35.5%
	満足	1.1%	2.1%	1.6%	23.7%	20.3%	48.8%
全体		2.9%	11.2%	5.1%	52.0%	28.8%	100.0%

た父親は少なかったものの、子どもは父親に対して満足している割合が高い。子どもの48.8%が「満足」と答えており、35.5%が「まあ満足」と答えている（図表-4）。一方、父親で満足しているのは28.8%にとどまり、「まあ満足」が52.0%、「やや不満」は11.2%を占めている⁵⁾。

家族と過ごす時間が「十分取れている」父親は64.1%が子どもとの関係に「満足」しており、「不満」「やや不満」は7.7%にすぎない。一方、「全く取れていない」父親は9.1%しか子どもとの関係に満足しておらず、13.6%が「不満」、22.7%が「やや不満」である。子どもとの関係に対する父親の不満は、自身の忙しさを主な原因としているようだ。

(3) 父親と子どものかかわり

週あたりの労働時間が長い父親が多くを占め、家族と過ごす時間が十分に取れていると感じている父親は少なかった（図表-2、図表-3）。子どもとかかわる実際の時間を、「スポーツや習い事などへの参加・手伝い」「勉強をみる」「学校・塾・習い事等への送り迎え」「PTAや子供会など地域の団体への参加」「自宅や公園などで一緒に遊ぶ」「その他」の6項目について週あたりの時間をそれぞれたずねており、それらを合計すると平均値は190分、つまり3時間強である⁶⁾。父親が費やしている時間は、母親の平均486分の4割程度である。

父親の27.6%は子どもと「よく話す」と答え、「ほとんど話さない」「全く話さない」は2.2%である。父親にとっての子どもとの会話は父親の子どもとの関係満足度との関連が非常に強く、会話が深い

ほど父親は満足している。「もっと増やしたい」という父親が55.8%いるが、もっと増やしたいと回答した子どもは28.7%にとどまっている。父親と子どもとの会話では、父親と子どもの双方が同じように話を聞きそして話すと77.8%の父親、81.3%の子どもが回答している。父親の平日の帰宅時間が遅いためにメールが頻繁に使用されているわけでもない（一日1回以上父親から送信3.6%、父親が受信3.0%）。

父母と子どもと一緒にレジャーや遊びをするのは、月平均1.47回程度である。週あたりの家族そろっての夕食回数は平均で2.83回、週2回と回答した世帯は34.6%である。平日の夕食は母と子で食べる人が多いとの回答は63.7%であるので、週末は家族がそろって平日は父抜きで夕食を食べているということになる。就寝前の過ごし方としては「家族みんなで過ごす」が最も多く40.3%を占める。

(4) 子どもの父親の満足度に影響するもの

既存の多くの研究と同様に、子どもの年齢と性別をコントロール変数として用いた⁷⁾。また、家族特性を示すものとして、母親の年収、父親の年収、両者の合計年収、母親の教育年数、父親の教育年数を考慮した。子どもの父親との関係の満足度に影響しているものとして、父親との時間、幼少期の父親の育児へのかかわり、会話頻度、夕食頻度、レジャー頻度、就寝前の過ごし方、情緒的サポートを用いた。

図表-5にそれらの相関関係を示している。子どもの年齢が高くなるほど父親との関係満足度は低下する。父親の教育年数、父親の年収、父親と

図表-5 主要な変数の相関関係

	母との関係 満足度(子)	父との関係 満足度(子)	妻との関係 満足度	子との関係 満足度(父)	子の抑うつ度	父の抑うつ度
子の年齢	-.234***	-.161**	-.042	-.157**	.287***	.004
子ども人数	-.012	.039	.016	.027	-.016	.000
母教育年数	.000	.004	.071	-.052	.039	.115*
父教育年数	.091	.109*	.017	-.031	.052	.034
母年収	.064	.048	-.030	-.075	-.039	-.044
父年収	.133*	.160**	.088	.020	-.063	.208***
父母年収	.096	.119*	.050	-.032	-.075	.105*
母労働時間(週)	-.074	-.087	-.070	-.076	.013	-.070
父労働時間(週)	.009	.053	-.018	-.093	.017	-.073
母の子との時間(週)	.118*	.051	-.015	.058	-.186**	-.009
父の子との時間(週)	.085	.159**	.111*	.175**	-.113*	.087
子が0-2歳時の父の育児頻度	.005	.073	.132**	.179**	-.035	-.059
子が3-6歳時の父の育児頻度	-.002	.091	.093	.155**	-.049	-.056
母子の会話頻度(母)	.202***	.001	.026	.110*	-.172***	.026
父子の会話頻度(父)	.206***	.305***	.280***	.530***	-.147**	.116*
夫婦の会話頻度(妻)	.093	.216***	.393***	.166**	.059	.077
家族全員での夕食の回数(週・母)	-.045	-.003	.060	.062	-.035	-.045
父母と一緒にレジャー頻度(子)	.192***	.181***	.066	.115*	-.153**	-.012
母の子への情緒的サポート(子)	.335***	.117*	.117*	.206***	-.147**	.041
父の子への情緒的サポート(子)	.172**	.418***	.182***	.309***	-.140**	.109*

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

母親の合計年収が高いほど親との関係満足度は上昇する。父親が子どもと過ごす時間が長いほど、父母の会話頻度が高いほど、父母と一緒にレジャーの頻度が高いほど、母親の子どもへの情緒的サポートが高いほど、父親の子どもへの情緒的サポートが高いほど、子どもの父親との関係満足度は上昇する。

ここで相関関係がみられたもののうち、互いの相関係数が高いものを除き⁸⁾、二値変数(子どもの性別、就寝前の過ごし方:家族みんなで過ごすことが多いか否か)とともに、コントロール変数もしくは説明変数として用い、父親との関係に「満足」か否か(「やや満足」「どちらともいえない」「やや不満」「不満」)を被説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。コントロール変数として用いた子どもの性別と子どもの年齢についてまず分析したが、子どもの性別は有意ではなかった。つぎに子どもの年齢と家族特性として用いた父親の年収とともに、行動的側面である家族全員の夕食頻度、父親との会話頻度、父親と過ごす時間、父母一緒にレジャー、就寝前の過ごし方を説明変数として分析したところ、家族全員での

夕食回数、父親との子どもの時間は有意な関係になかった。さらに、子どもの年齢、父親の年収とともに主観的尺度である父親の子どもへの情緒的サポートを用いたところ、すべて有意であった。最後に、有意であったこれらの変数を用いた結果を図表-6に示している。最終的には、子どもの年齢が低いほど、父親の年収が高いほど、父親の子どもへの情緒的サポートが多いほど、父親との会話頻度が高いほど、子どもは父親との関係に「満足」と回答する傾向がある。

(5) 子どもの抑うつ度に影響するもの

抑うつ度についても同様に、コントロール変数として子どもの年齢、図表-5で相関関係の見られた母親との時間、父親との時間、母親との会話頻度、父親との会話頻度、父母と一緒にレジャー頻度⁹⁾、母親から子どもへの情緒的サポート、父親から子どもへの情緒的サポートを順次投入して分析した結果が図表-7である。時間、会話頻度、情緒的サポートいずれも、父親との関係の変数は有意ではなく、母親との関係が子どもの抑うつ度と関連していることがわかった。しかし、親との関係満足度で

図表-6 父親に満足しているか否かの二項ロジスティック分析結果

	B	標準誤差	Wald	有意確率	Exp (B)
子の年齢	-.105	.052	4.118	.042	.901
父年収	.001	.000	4.544	.033	1.001
父の子への情緒的サポート(子)	.702	.191	13.493	.000	2.018
父子の会話頻度(父)	.439	.116	14.400	.000	1.551
家族全員と就寝前に過ごすことが多いか	.226	.249	.822	.365	1.253
父母と一緒にレジャー頻度(子)	.144	.090	2.570	.109	1.155
定数	-2.657	.984	7.298	.007	.070

$\chi^2 = 76.79$, $p < .001$, -2 対数尤度 415.205, Cox-Snell R^2 .195, Nagelkerke R^2 .259

図表-7 子の抑うつ度に関する回帰分析

	1			2			3		
	B	ベータ	有意確率	B	ベータ	有意確率	B	ベータ	有意確率
(定数)	8.688		.000	10.342		.000	13.598		.000
子の性別(男性=1,女性=0)	-.289	-.039	.383						
子の年齢	.451	.320	.000	.350	.239	.000	.340	.238	.000
父の子との時間(週)				.000	-.034	.509			
母の子との時間(週)				-.001	-.093	.085			
母と子との会話頻度(母)							-.469	-.116	.019
父と子との会話頻度(父)							-.240	-.073	.144
父の子への情緒的サポート(子)									
母の子への情緒的サポート(子)									
父との関係満足度(子)									
母との関係満足度(子)									
	adj-R ² .098, p < .000			adj-R ² .081, p < .000			adj-R ² .090, p < .000		

	4			5		
	B	ベータ	有意確率	B	ベータ	有意確率
(定数)	10.273		.000	14.150		.000
子の性別(男性=1,女性=0)						
子の年齢	.426	.302	.000	.399	.283	.000
父の子との時間(週)						
母の子との時間(週)						
母と子との会話頻度(母)						
父と子との会話頻度(父)						
父の子への情緒的サポート(子)	-.233	-.045	.377			
母の子への情緒的サポート(子)	-.590	-.085	.097			
父との関係満足度(子)				-.334	-.090	.080
母との関係満足度(子)				-.791	-.164	.002
	adj-R ² .108, p < .000			adj-R ² .149, p < .000		

みると、父親との関係満足度も母親との関係満足度も子どもの抑うつ度と関連していた。いずれも満足している方が抑うつ度が低いのである。

5. 考察

分析結果は次のとおりである。父親の年収が高いほど、父親の子どもへの情緒的サポートが多い

ほど、父親との会話頻度が高いほど、子どもは父親との関係に「満足」と回答する傾向がある。一方、子どもの抑うつ度に対しては、母親との関係を考慮すると、父親が会話をしても、時間を費やしても情緒的サポートを行っても有意な影響は見られなかった。しかし父親との関係に満足しているほど子どもの抑うつ度は低い。

父親の年収に対する解釈としては、前向きな態

度の子どもの特徴として、父親が仕事や家事にやりがいを感じていることをあげている傾向があるとされていることと関連しているのではないかと考えられる(矢澤ほか 2002)。年収が父親の仕事のやりがいの代理変数となっているのではないかと考えられる。

学童期、思春期の子どもの抑うつ度に対しては、母親の影響が強いことが示唆された。一方で父親との関係の満足度の影響もみられ、父親との関係満足度は会話や情緒的サポートと関連していることから、父親が子どもに対する理解を深めることが重要であると考えられる。また、青年期になると同性の親の影響が強いと分析結果もあり、この時点での父親の子どもへの態度は将来的に重要になるかもしれない(川島ほか 2008)。

本稿では、父親の子育て、子どもとのかかわりについて、それが分析概念上何にあたるのかを明言せずに分析を行ってきた。たとえば小保方・無藤(2006)等のように、親との関係を「親ストレス」¹⁾として子どもの抑うつ度の原因と考えることもできる。また、サポートティブな親との関係が、子どもがストレスに対処する際の資源となっていると考えることもできる。分析枠組みにおいていずれかのモデルを設定することは可能であるが、ストレスにも資源にもなりうるというのが現状であろう。いずれにしろ、父親が子どもとの関係を良好に保つことは子どもにとって財産であることにはかわりはない。

注

- 1) 「育児」と「子育て」の使い方の違いは研究者によって異なるが、「育児」を用いる場合の対象は子どもの年齢が相対的に低く乳幼児・未就学児、内容としてはケアを中心としている場合が多いのに対して、「子育て」は「育児」も含むが、対象は相対的に年齢層が高く学童期、思春期まで含まれ、内容もケア以外に勉強をみる、しつけをするなど範囲が広い場合が多い。
- 2) 調査方法、調査内容、データの特性については、本調査報告書(財団法人家計経済研究所編 2009)ならびに今号の「現代核家族調査」の概要を参照のこと。
- 3) 該当する子がいる世帯で対象子の回答率は47.9%である。また、回答のあった世帯のうちステップファミリーの可能性のある世帯は4%であった
- 4) 図表-1に掲載した変数について説明する。「性別」は男性=1、女性=0。「母年収」「父年収」「父母年収」

「母労働時間」「父労働時間」は選択肢の中央値を用いた。「母の子との時間」「父の子との時間」は「スポーツや習い事などへの参加・手伝い」「勉強をみる」「学校・塾・習い事等への送り迎え」「PTAや子供会など地域の団体への参加」「自宅や公園などで一緒に遊ぶ」「その他」の合計時間とした。5項目について記入があり「その他」のみ無記入だったケースについては、「その他」を0分とした。「家族全員と就寝前に過ごすことが多いか」については、「あなたは家に帰ってから、眠るまで誰と過ごすことが一番多いですか」について、選択肢「一人で過ごす」「お母さんと過ごす」「きょうだいと過ごす」「家族みんなで過ごす」「お父さんと過ごす」のうち、「家族みんなで過ごす」を選んだか否か。「父母と一緒のレジャー」は選択肢を月単位の回数に変換。「母子の会話頻度」「父子の会話頻度」「夫婦の会話頻度」は、「よく話す」=6、「話す」=5、「まあ話す」=4、「あまり話さない」=3、「ほとんど話さない」=2、「まったく話さない」=1としている。「母の子への情緒的サポート」「父の子への情緒的サポート」は、それぞれ「お父さん(お母さん)はあなたの心配事や悩みを聞いてくれますか」「お父さん(お母さん)はあなたの能力や努力をほめてくれますか」の2項目について「はい」=1、「いいえ」=0の合計である。「父との関係満足度」「母との関係満足度」「夫との関係満足度」「妻との関係満足度」「子との関係父満足度」「子との関係母満足度」は、「満足」=5、「まあ満足」=4、「どちらともいえない」=3、「やや不満」=2、「不満」=1である。子の抑うつ度は、「楽しみにしていることがたくさんある」「元気いっぱいだ」「やろうと思ったことがうまくできる」「いつものように何をしても楽しい」「落ち込んでいてもすぐに元気になる」については「いつもそうだ」=1、「ときどきそうだ」=2、「そんなことはない」=3、「泣きたいような気がする」「逃げ出したいような気がする」「一人ぼっちの気がする」「とても悲しい気がする」については「いつもそうだ」=3、「ときどきそうだ」=2、「そんなことはない」=1として合計。α係数は.812。

父の抑うつ度については、「ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと」「家族や友達から励ましてもらっても気分が晴れないこと」「憂うつだと感じたこと」「物事に集中できなかったこと」「食欲が落ちたこと」「何をしても面倒と感じたこと」「何か恐ろしい気持ちがあったこと」「なかなか眠れなかったこと」「ふだんより口数が少なくなったこと」「一人ぼっちで寂しいと感じたこと」「毎日が楽しい」と感じたこと(逆転項目)。「悲しいと感じたこと」の12項目について、「まったくなかった」=1、「週に1~2回」=2、「週に3~4回」=3、「ほとんど毎日」=4として合計。α係数は.890。今回の分析対象に限定するとα係数は.883。

- 5) 父親の子どもとの関係の満足度は、対象となった子どもとの関係に対する満足度である。

- 6) 子どもとの時間については対象子との時間に限定していない。
- 7) きょうだい数（子ども数）もコントロール変数として考えたが、主要な変数との相関関係は見られなかった（図表-5）。
- 8) 父親の年収と父親と母親の合計年収は相関係数が高いので、父親との関係満足度との相関係数が高い父親の年収を用いた。父親との会話頻度と夫婦の会話頻度も同様に父親との会話頻度を用いた。同様に、母の子への情緒的サポートと父の子への情緒的サポートについても父の子への情緒的サポートを用いた。
- 9) 父母と一緒にレジャー頻度は、子の年齢とともに回帰式に投入すると、有意な結果は得られなかったので図表-7から除いた。

文献

- 石井クンツ昌子, 2009, 「父親の役割と子育て参加——その現状と規定要因, 家族への影響について」『季刊家計経済研究』81: 16-23.
- 内田哲郎, 2001, 「父親の育児？」『季刊家計経済研究』50: 32-38.
- 内田利広・藤森崇志, 2007, 「家族関係と児童の抑うつ・不安感に関する研究——子どもの認知する家族関係」『京都教育大学紀要』110: 93-110.
- 大山七穂, 2001, 「親子関係と親の影響力」『第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書』内閣府政策統括官（総合企画調整担当）。
(<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/seikatu2/html/html/hyoushi.html>, 2010.01.15)
- 小笠原祐子, 2009, 「性別役割分業意識の多元性と父親による仕事と育児の調整」『季刊家計経済研究』81: 34-42.
- 川島亜紀子・眞築城和美・菅原ますみ・酒井厚・伊藤教子, 2008, 「両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連」『教育心理学研究』56(3): 353-363.

- 木脇奈智子, 2000, 「男性の子育て参加を促す要因の検討——文献にみる「新しい父親像」を中心に」『羽衣学園短期大学研究紀要』36: 53-61.
- 小保方晶子・無藤隆, 2006, 「中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向との関連について——ストレスとコーピングからの検討」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』3: 65-73.
- 財団法人家計経済研究所編, 2009, 「現代核家族のすがた——首都圏の夫婦・親子・家計」財団法人家計経済研究所.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則, 2002, 「夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連——家族機能および両親の養育態度を媒介として」『教育心理学研究』50(2): 129-140.
- 内閣府 仕事と生活の調和推進室, 2007, 「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現に向けて」。
(<http://www8.cao.go.jp/wlb/government/index.html>, 2010.01.15)
- 船橋恵子, 2006, 『育児のジェンダー・ポリティクス』勁草書房.
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子, 2002, 「父親のケア意識・職業意識とジェンダー秩序——子育て期の男性のライフスタイルと市民生活調査から」『経済と社会』30: 1-28.
- UFJ総合研究所情報通信・家族社会室, 2003, 『子育て支援策等に関する調査研究』。
(<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1a.html>, 2010.01.15)

ながい・あきこ 日本女子大学人間社会学部 准教授。
家族社会学、女性福祉論、家族福祉政策論専攻。
(nagaia@fc.jwu.ac.jp)